

# カナダ国・アルバータ州におけるバドミントン競技の 強化策について

## A Reinforcement System of the Badminton in Alberta State in Canada

北 村 優 明 小 島 一 夫

KITAMURA, Masaaki

KOJIMA, Kazuo

### 1. はじめに

カナダにおけるバドミントン競技の歴史は古く、1899年に第1回全英選手権が開催された翌年の1900年首都オタワで最初の競技が行われ、1907年にはモンリオールにカナダで最も古いバドミントンクラブが結成された。1914年には国内のクラブ選手権大会が始まり、またカナダで初めてのオープン大会も行われた。その後、1921年にカナダバドミントン協会が設立された。そしてカナダは1934年国際バドミントン連盟（IBF）の設立と同時に加盟国となった。<sup>2)</sup>日本はというと、1946年カナダに遅れること25年後に財団法人日本バドミントン協会が設立され、1952年3月19日に国際連盟に加盟している<sup>2)</sup>。

和田（2006）は、流行や文化はリアルタイムで入ってくるが、文化が性格を作るのには、タイムライジングが生じる<sup>3)</sup>と言っている。それは、現代の日本人は北米からの影響を多分に受けており、今日の日本で起きている社会問題もかつて10数年前に北米が経験していたということである。また筆者らは以前からカナダのバドミントンに強い感心を持っていた。それは同じ北方圏に位置していて近年パンアメリカン地区における競技力の向上が目覚ましいということであった。そこで筆者らは現地での調査を行った。筆者北村は2004年9月21日～28日の期間で北海道・アルバータ州親善スポーツ交流でエドモントン市・カルガリー市、また小島は2007年8月30日～9月9日の期間においてカナダバドミントン協会等の現地調査研究を行った。地元協会とカナダ及び各国のナショナルチームの選手たち、さらには地元のバドミントンを支援する企業からの協力を得て、アルバータ州とりわけその中心であるカルガリー市のバドミントン競技への取り組みと現状の中から、現在北海道のみならず日本が直面している、そして今後するであろう競技スポーツの諸問題と対策への考察と論述を試みた。

### 2. カナダバドミントン協会（バドミントン・カナダ）の組織と強化方針について

カナダバドミントン協会の事務局はオタワ市にあり、現在Marty Deacon女史が専務理事をつとめている。前述したが協会の歴史は古いが国際大会に向けての実質的活動が始まったのは、バルセロナ・オリンピック（1992年）以降であるといえる。というのは1993年、ロイ・ロバーツ氏によりプロ管理システムが導入された。以後、海外からのコーチを招聘したが、現在はカ

ナダバドミントン協会には専属のコーチは置いていない。しかし、エリア・オブ・フォーカス（Area of Focus）の高次元実行計画のなかで23歳以下のジュニア開発の優先性を強調している。またアスリート支援プログラム（AAP）についてのガイドラインも提示している。このプログラムはカナダ連邦政府資金によるもので4つのランク（カード）に別れ、月額1500ドルから900ドルを援助されるというものである。これにはオリンピックや世界選手権大会の結果に基づいて見直しが毎年ある。受領期間は毎年11月1日から翌年の10月31日までである。AAPのカードを取得した選手にはこのほかにも、トレーニングや大学の授業料の援助などのサポートも受けられるようになっている。さらに以下の表のようなコーチの発展モデルと協会登録者（選手）の発展モデルも提示している<sup>1)</sup>

**Badminton Canada - Coach Development Model<sup>1)</sup> (表-1)**  
 (バドミントン・カナダーコーチ発展モデルより筆者らが作図)

地域に流れ	教育上の流れ		競技の流れ
		< 5 %	・ マスターコーチ 国際試合に出る選手の指導全般
		< 5 %	・ 全カナダレベルのコーチ 能力の高いナショナルメンバーの指導
		5 %	・ 地区レベルのコーチ カナダ国内の各年齢別のトップレベルの試合に出る選手の指導
	・ 大学のコーチ 期ごとの、さらには国内大会の計画を立てる。	20%	・ クラブコーチ バドミントンの諸技能の導入指導
	・ 高校のコーチ 大会と作戦のプログラムを6週間分つくる		
	・ 中学のコーチ 競技の基本的技術を指導する。	↑	・ 競技的コーチ 長期的発達のための導入指導
・ 地域の指導者 基本的な技術、ルール、ダブルスの指導			
		70%	
	・ 小学校の指導者 ルールと技術の導入指導をする。	・ 登録のためのインストラクター 規則、安全、技術の導入指導をする	
・ レクリエーションセンターマネージャー 初心者への入門指導をする		↓	

Badminton Canada - Participant Development Model<sup>1)</sup> (表-2)  
 (バドミントン・カナダ—会員発展モデルより筆者らが作図)

地域スポーツの流れ	指導の流れ	競技の流れ	L T A D
		地区のトレーニングセンターやクラブの基本的プログラムで18歳以上のエリート選手に訓練の機会を与える	勝つための練習
		< 5 %	
		州のチームやクラブの基本プログラムで14~18歳までのエリート選手に訓練の機会を与える	< 5 %
		大学や短大チームのトーナメント	5 %
優勝者	優勝者	優勝者	
特別強化選手	特別強化選手	特別強化選手	
		11~14歳までのエリートジュニアチームのトーナメント	
		中学校チームと高校チームそれぞれのトーナメント	練習のための練習
		入門段階でのクラブの指導プログラムでの訓練	20%
		7歳以上のレクリエーション的構成プログラムには初心者レベルでの試合におけるランキング作成も含む クラブ、地域センター、学校の環境づくり	練習法を学ぶ
学校、地域センター、ジュニアクラブ、教会のホール、大学、短大で活動している練習プログラムの作成が必要ではない子供から大人までの全ての人々		↑ 70% ↓	基礎

## (1) スポンサーについて

公式のスポンサーとして以下の5つの企業及び団体がある。<sup>1)</sup>

- ①ヨネックス (Yonex)
- ②ブラック・ナイト (Black Knight)
- ③スポーツカナダ (Sport Canada)
- ④カナダオリンピック委員会 (Canada Olympic Committee)
- ⑤カナダコーチ協会 (Coaching Association of Canada)

バドミントンがオリンピックの正式種目になったことで国内の企業がスポンサーになってナショナルチームのメンバーをサポートし始めている。特にブラック・ナイトという企業は多数のナショナルチームの選手とデンマークからプライベートコーチを招聘している。この点では日本のトップ選手を抱える企業との共通点がある。

## (2) 他のスポーツとのかかわりについて

カナダ統計局の調べによると15歳以上のカナダ人が好んでするスポーツは以下の通りである。<sup>4)</sup>

カナダでのスポーツ人気度調査 (15歳以上対象)						
Source : Statistics Canada (2005年)						
	人口 (計)		男		女	
1. ゴルフ	1,802,000	7.4	1,325,000	11.1	476,000	3.9
2. アイスホッケー	1,499,000	6.2	1,435,000	12.0	65,000	0.5
3. 野球	1,339,000	5.5	953,000	8.0	386,000	3.1
4. 水泳	1,120,000	4.6	432,000	3.6	688,000	3.1
5. バスケットボール	787,000	3.2	550,000	4.6	237,000	1.9
6. バレーボール	740,000	3.1	394,000	3.3	350,000	2.8
7. サッカー	793,000	3.0	550,000	4.6	189,000	1.5
8. テニス	658,000	2.7	434,000	3.6	224,000	1.8
9. スキー	657,000	2.7	342,000	2.9	315,000	2.6
10. 自転車	608,000	2.5	358,000	3.0	250,000	2.0
11. クロスカントリースキー	512,000	2.1	208,000	1.7	304,000	2.5
12. 重量あげ・ジム	435,000	1.8	294,000	2.5	140,000	1.1
13. バドミントン	403,000	1.7	199,000	1.7	204,000	1.7
14. フットボール	387,000	1.6	347,000	2.9	40,000	0.3
15. カーリング	312,000	1.3	179,000	1.5	133,000	1.1
16. ボーリング (10ピン)	282,000	1.2	132,000	1.1	150,000	1.2
17. ソフトボール	210,000	0.9	118,000	1.0	92,000	0.7

18. ボーリング (5ピン)	200,000	0.8	78,000	0.7	122,000	1.0
19. スカッシュ	163,000	0.7				
20. 空手	129,000	0.5	81,000	0.7	48,000	0.4
21. フィギュアスケート	121,000	0.5	46,000	0.4	75,000	0.6
22. ラグビー	104,000	0.4				
23. 陸上ホッケー	91,000	0.4				
24. スノーボード	81,000	0.3				
25. インライン・スケート	70,000	0.3				
26. ラケットボール	58,000	0.2				
27. その他	323,000	1.3				
*複数返答あり	24,260,000	%	11,937,000	%	12,323,000	%

カナダの総人口は3075万人（2001年）<sup>6)</sup>から上記のスポーツ人口2426万人を比べると79%の人々がスポーツをしていることになる。しかも上記の表は15歳未満がカウントされていないのでこのパーセンテージはかなりの割合で100%に近づくことになる。この表においても、カナダの人々は日本人に比べてはるかにスポーツ好きであることがわかる。しかもこの傾向は先進欧米諸国に共通して見られる。<sup>6)</sup>

カナダのバドミントンについて言及するならば、15歳未満をいれると推定して、人口の1.7%のおよそ52万人がプレーしていることになる。日本の場合、日本バドミントン協会への登録人数は22万人（2006年）で未登録ではあるがプレーしている人々の数を合わせても100万人程度であろう。人口比にすると1%足らずである。このことから国技に近いアイスホッケー、そしてゴルフ・野球に比べればメジャーなスポーツとはいえないまでもカナダ国内でのある程度のステータスをバドミントンは得ているといえる。

### 3. アルバータ州の地理的、経済的、社会的環境について

カナダの西部の州、プレーリー西端にある。ロッキー山脈の主要分水界を西境とし、その東側の大平原は世界的な春小麦の産地だった。1947年州都エドモントンで石油が発見されて以来、天然資源の宝庫として注目されるようになった。エドモントン、カナダで人口第2の都市カルガリーを中心に原油（オイルサンドを含む）、石炭、天然ガスを産し、1974年以降石油化学工業が飛躍的に発展した。66万1848km<sup>2</sup>。297万4807人。<sup>5)</sup>州の面積は日本の約1.8倍もあるが人口は北海道の約半分と非常に人口密度が低い。カルガリー市内を歩くとアジア系の人々が多いことに驚かされる。人種的差別はアメリカ合州国に比べるきわめて少ない。

### 4. アルバータ州のバドミントン協会について

アルバータ州のバドミントン協会の事務局はカルガリー市のアルバータバドミントンセンタ

一内にあり、ジェフ・ベル（Jeff bell）が専務理事を務めている。以下の項目についての調査をした。

#### （1）競技人口（層、人種）及びクラブの数とその経営状況について

アルバータ州の会員登録数は1150名（2007年7月現在）<sup>7)</sup>でクラブ数は47ある。ウインタークラブのような会員数100名を越す規模の大きいクラブがいくつかある。またジュニアを対象としたクラブや中国、インドネシア、マレーシア系の人々が作っているものもある。周知の通りカナダは英語と仏語の2ヶ国語を公用語としているがアルバータ州でバドミントンをしている人々の多くはアジアからの移民で実に多国語が飛び交っている。会員の内訳もアジア（中国、韓国、インドネシア、マレーシア、台湾）系とヨーロッパ系がほぼ半々である。

クラブの会員システムは年会費制と月会費制があり、平均すると月1万5千円位を活動費に当てているようである。元世界チャンピオンのアーディー・ウラタナが所属するThe Glencoe Clubはアルバータ州で最も高額なメンバーシップクラブで、入会金が460万円、年会費は11.5万円となっている。一般的なプライベートクラブは、入会金が57.5万円、年会費は6万円程度である。カルガリーの各クラブの会員は比較的裕福な家庭が多いように見られた。各クラブにはたいていプライベートコーチがいてそれぞれのレベルにあわせた指導をしている。中にはそれを生業にしているコーチもいる。クラブの多くには親子割引があつて家族ぐるみの活動を歓迎している。クラブチームには入っていない会員は公共の施設で練習している。また大学や短大を除き小・中・高等学校での部活動はなく、地域のジュニアクラブや教会のホールでも活動している。競技の向上を図りたいジュニアは、プライベートバドミントンクラブのジュニアチームに所属し、有名コーチのレッスンを受けるか、個人でコーチを探し報酬を払った上で教えてもらう。有名コーチのジュニア指導料は、コートレンタル（1時間）、練習球、指導報酬で、1回5千円前後となり、3～4人で分割して負担している。トップクラスのジュニアは、週5回、1回につき2～3時間コーチ付で練習するので、費用は1人に付き1週間で1.5～2万円前後となる。指導料は対象とするジュニアで変わる。

#### （2）組織と強化方針について（アルバータバドミントン協会）

上述したような人員構成の中でアルバータバドミントン協会はバドミントンプレーヤー（会員）に対して、高い倫理性をもった11か条からなる会則を提示している（Alberta Officials Code of Ethics）。

そして以下のような傘下組織や個人へのサポートと提携をしている。

- ①基本的な個人への提携
- ②競技者・コーチ・オフィシャルカード
- ③基本的なクラブとの提携
- ④大きなクラブとの提携
- ⑤大学との提携

またアルバータバドミントン協会はカナダコーチ協会が出している国家公認コーチングプロ

グラム（NCCP）に準じてコーチを養成しようとしている。年間のスケジュール表をウェブ上に掲示もしている。

さらに前掲（表2）したカナダバドミントン協会の発展プログラムに準じて独自の強化方針とそれに則った計画を提示している。協会主催のコーチングクリニックについては以下の通りである。

- ① 初心者レベルのクリニックは学校開放を利用するため平日の放課後、協会からコーチを派遣する。シャトルはヨネックスからメービス300が提供される。
- ② トレーニングクリニックは9月～4月までの週末に実施され参加資格は12歳以上で1日6時間の練習を2日間実施する。
- ③ トレーニングキャンプは夏とクリスマス休暇を利用して3日～5日間実施する。参加資格は12歳～21歳までの上級者で宿泊費と食費は145ドル～350ドルを徴収する。シャトルはヨネックスから提供がある。

いづれにしてもカルガリー市がアルバータ州のバドミントンの中枢であることは紛れもない事実である。

### （3）元有名選手の有力クラブへの招聘について

アルバータ州（カルガリー市）は他の州に先駆けて国際的に活躍した選手をコーチとして招聘している。とりわけインドネシア出身でシングルス元世界チャンピオンのアーディー・ウラタナが挙げられよう。そして、最近韓国からオリンピックのダブルス金メダリストのキム・ドング・ムン（KIM Dong Moon）と混合ダブルス金メダリストのラ・キョング・ミン（RA Kyung Min）夫妻が前掲したウインタークラブにコーチとして招かれている。彼らはプライベートコーチとしてジュニアからシニアにいたるまでクラブの会員の指導にあたっている。有名・無名は問わずどこのクラブにもそれなりのコーチはいる。しかし、大きなクラブの経営戦略として著名人を招聘している。アルバータバドミントン協会にもグレッグ・ブリー（Greg Bury）がジュニア担当のコーチとしている。これは前掲したカナダバドミントン協会の発展プログラムに準じて置かれているものである。

### （4）ヨネックスカナダ社の同バドミントン協会への期待と働きかけについて

ヨネックスカナダ社はカナダバドミントン協会のオフィシャルスポンサーのひとつでもあり、カナダ全国にわたりビジネスとともにバドミントンの普及・発展に貢献している。アルバータ州においても地元協会とタイアップして様々なイベントに人的・物的な支援と協力をしている。前掲したコーチングクリニックや「ヨネックス カルガリー キッズ 1/2 デイ キャンプ」と称して、12歳以下の子供を対象に7月9日～12日、7月23日～26日、8月7日～9日の3回にわたって高校や小学校の施設を借りながら指導・強化にかかわっている。またヨネックスカナダ社の本社オフィスが首都でもありカナダバドミントン協会の事務局があるオタワに置かれなく、カルガリーにあることにおいてもアルバータ州（カルガリー市）がカナダのバドミントンの重要拠点であることがいえよう。

#### (5) 多数のナショナル選手のトレーニング地としてのカルガリー

前述したこともあり、ナショナルチームの選手の多数がカルガリー市でトレーニングをしている。その理由をナショナルチームの一人でありシドニーオリンピックにシングルスで出場したチャーメイン・リード (Charmaine Reid) 選手に聞いた。彼女は活動の拠点をカルガリーにしている理由として、施設の設備、コーチの存在、練習相手、国内外の情報の取得・収集の容易さ、スポンサーのバックアップの速さなど、いくつかのトレーニング環境を挙げた。

#### (6) 隣接州 (サスカチュワン、ブリティッシュ・コロンビア) とのかかわり

アルバータ州バドミントンの強化システムについて調査研究するにあたって、大元のカナダバドミントン協会の強化プログラムの要約の必要性を感じ冒頭で記述した。さらにここではさらに隣接州 (サスカチュワン、ブリティッシュ・コロンビア) とのかかわりについて若干の記述をすることにした。

カナダバドミントン協会は7つの州協会から成り立っているともいえる。各州のバドミントン協会はカナダバドミントン協会の意向を受け継ぎつつも州協会独自の運営をしながらお互いに協力し合い、また切磋琢磨している。

アルバータ州の東側に隣接するサスカチュワン州 (サスカトゥーン市) は2007年のカナダオープンの開催をした。国際大会としてはお世辞にも華麗な大会とは言えなかったが、大会運営にあたる地元協会の献身的な努力には敬服した。特にボランティアで日本の国土の2倍もある広い地域から集まってきた退職した人々のサポートはすばらしかった。大会終了後のパーティーの席上でサスカチュワン州バドミントン協会会長のグラント・マクドナルド氏が謙虚ではあるが誇らしげにこの協会の運営について語っていた。

一方、西側に隣接するブリティッシュ・コロンビア州 (BC) はアテネオリンピックにシングルスで出場したアンナ・ライス (Anna Rice) を輩出しており、彼女は世界ランキング22位 (2007年8月23日現在) でカナダバドミントン協会のオフィシャルスポンサーのひとつでもあるブラック・ナイト社とプロ契約を結んでいる。また同社は彼女たちのためにデンマークからプライベートコーチを招聘している。バンクーバー市を中心にこの州にもたくさんのクラブがある。アジア系の会員も多い。この州の出身でBWFの国際審判員をしているマイク・ウォーカー (Mike Walker) 氏はこの州の強化も着実に行われていることを強調していた。

## 5. 考察

アルバータ州バドミントン協会の選手強化プログラムはカナダバドミントン協会の強化プログラムに準じているが、そのプログラムの内容と実際に矛盾点があるように思える。第一に、表1と表2のコーチと選手 (会員) の発展モデルにおいて、クラブのコーチの位置が地区レベルのコーチの下にあるにもかかわらず (表1)、選手 (会員) 強化においては勝つための5%未満のトップレベル強化にクラブのトレーニングプログラムを掲げていることである (表2)。第二に実際の強化練習、合宿、遠征に関しては選手が各自の計画を立てて協会が承認す



るような形をとっている。これらのことを良いほうにとれば、トップ選手の強化に関しては選手の自主性を尊重しているといえるが、一方では現にナショナルチームにコーチを置いていないこと、協会主導の組織立った強化策がとられていないことなどからカナダバドミントン協会運営上の組織的、経済的問題があると推測される。また、協会の組織や倫理性と高い理想をもった諸計画の提示はカナダオリンピック委員会、カナダコーチ協会、カナダ連邦政府からの資金調達のため、さらには一般愛好者に向けての形式的なものなのか。あるいはカナダが連邦制をひいているため実質的には各州自治にまかせているのか。筆者たちはそう考えたくない。日本バドミントン協会においても「アクション・プラン」なるものが存在するが実際に活用しているとはいえない。社会・政治評論家の竹村健一氏が、以前テレビ討論会で日本の政治について「政治（民主主義）の制度は悪くない、政治家が問題だ。」と言っていたことと似てはいまいか。

アルバータ州の強化は国のプログラムに準じつつ国のそれとは異なり地味ではあるが着実に進展しているといえる。前述した（１）～（５）までは実際に行われているのである。特に今後の発展が期待できるのは、第一にカナダの国民の多くがスポーツを楽しんでいることである。これはスポーツ・フォー・オール<sup>（註）</sup>の精神がカナダの国民性に合致しているといえる。第二に協会は徹底して会員の活動の場の拡大と各クラブへの協力とサポートに徹している。第三に各クラブは協会に意向を受けて独自の経営策を打ち立てて実践している。まずクラブの多くには親子割引があって家族ぐるみの活動を歓迎していること。そして、その最たるものが元世界チャンピオンのアーディー・ウラタナやオリンピックのダブルス金メダリストのキム・ドング・ムンと混合ダブルス金メダリストのラ・キョング・ミン夫妻のような元有名選手をクラブの目玉コーチとして招いていることである。つまり、協会とヨネックスらのスポンサーがバドミントンの啓蒙をし、各クラブが選手強化を図れば普及と強化が効率よくできるわけである。

そこで、地理的に同じ北方権に位置するアルバータ州と北海道のバドミントンの強化における共通点と差異、そしてこれからの方向性については次のようなことがいえよう。

まずジュニアのバドミントン（U19）の指導環境についてであるが、日本の場合ほとんどが教員主導で行われている。アルバータ州においても教員の指導者はいるが学校体育以外の活動（社会体育及びクラブ）のため、指導者の教員の割合としては少ない。しかし、近年の日本においても中・高の部活動に少子化や文科省の推進した「ゆとり教育」の影響やスポーツ少年団、ジュニアクラブの出現で学校体育主導の形が崩れつつある。そして、共存の道を探しているのが現状であろう。さらに今後、意味合いの違いはあるがアルバータ州のような形をとらざるを得なくなってくるだろう。つまり、これまでバドミントンの指導が教員としての職務の中に含まれていたのが、今後徳育を大切にす教員は地域社会への参加・貢献あるいはボランティア、さらに指導に情熱をもった教員は入会規約のしっかりしたジュニアクラブのコーチといった形に成っていくだろう。前述した意味合いの違いとはカナダ（アルバータ州）の場合、個人の活動・行動は本人の自主性と自己責任の上に成り立っているのだが、近年の日本（北海

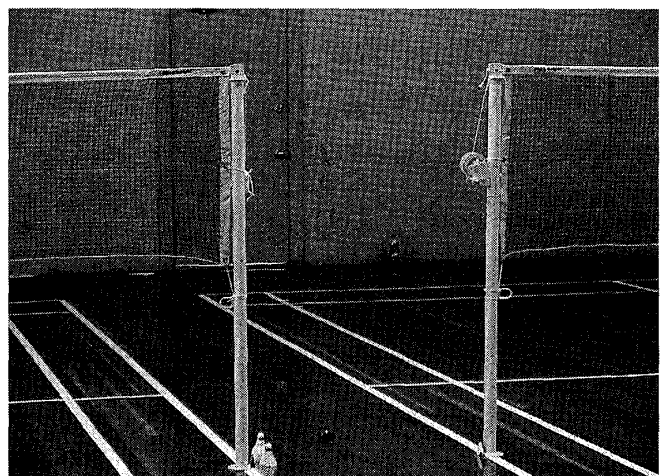
道) の場合、「親バカ」(子供のために我慢できる) が悪く変貌した「バカ親」(子供のためと称して親本人がキレル) とそれに養育された子供たちの出現により、指導形態を変えざるを得なくなってきたという現実があるからだ。

選手の強化において、カナダのような自主性と自己責任を持った児童・生徒への指導の中からエリート選手を育成するのが理想である。現にアイスホッケーや野球、ゴルフといったカナダでメジャーといわれる競技はそれを実現している。しかし、バドミントン競技において、現時点で世界的トップアスリートがいないのはなぜか。そこで筆者たちはカナダのバドミントン競技におけるエリート選手の育成について論議を交わした。それはカナダの国の問題なのか、あるいはバドミントン協会の問題か、それともバドミントン競技そのものに問題があるのか等であった。答えは容易なところから出てきた。それは、カナダ滞在中ホテルやレストランのテレビのほとんどがアイスホッケーと野球を放映していたことだった。北海道においてもアイスホッケーは本州に比べてメジャーではあるが、カナダには到底及ばない。夏なのに毎日といっていいほど放映されているのである。日本の野球なみである。オリンピックでもカナダとロシアは双璧である。それではカナダのアイスホッケーがなぜ強いかであろうか。メジャースポーツだから強いのか？強いからメジャーなのか？それは、Jリーグを立ち上げた日本のサッカー競技の発展の歴史から容易に学ぶことができよう。

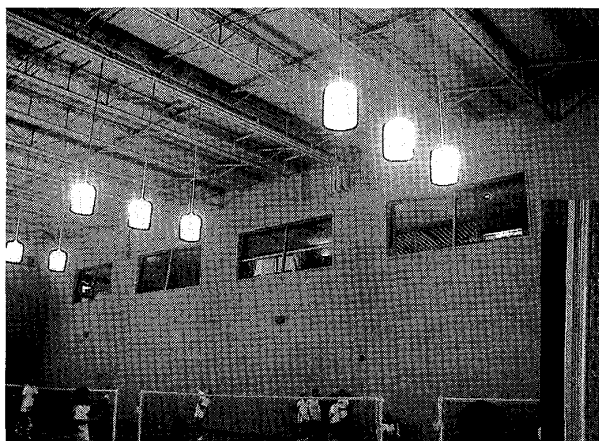
現時点においてバドミントンのレベルははるかにカナダより日本のほうが高い。しかし、カナダの強化プログラムと大きな差異のないデンマークに日本は歯が立たない。

強化をするのは人である。その人の取り組み方の違いが結果として出てくる。今後においてカナダが日本を越えることも、日本がデンマークに勝つこともありえないことではない。つまり指導する人(コーチ)が確固たる信念と使命感をもち、指導される人(選手)も競技に対する情熱と高い自己実現欲求をもって目標へのトレーニングができるあらゆる環境の整備こそが何よりも大切なことではないだろうか。

最後に、この研究をまとめながら筆者らバドミントンの強化に携わるものとして、改めて「真の強化の目指すところは何か?」。という課題と向き合うこととなった。



(カラー印刷でなく残念！すべて器具は白に統一されている)



(クラブでの練習風景：照明は間接照明、コート間に設置している)

(アルバータ州バドミントン協会専務理事：ジェフ・ベル氏・北村)



(注)「スポーツ・フォー・オール」とは、国際的には「みんなの生涯スポーツ」という意味合いをもつ。一般大衆の「だれもが」「いつでも」「どこでも」スポーツや身体活動に参加できる権利を享受できるというヨーロッパ生まれの考え方は、ドイツ・イギリスを中心に世界に広がり、少なくとも90カ国以上の国々が、「スポーツ・フォー・オール」を政策に取り入れて、生涯スポーツの進行事業を行っている（山口泰雄1996）。

## 付記

本研究は平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」(「学術フロンティア推進事業」)の助成をうけて実施した。

### 〔資料と文献〕

- (1) Badminton Canada <http://clubweb53.visuallocal.com/default.aspx>
- (2) 財団法人日本バドミントン協会名簿集（平成17、18年度）p.1
- (3) 和田秀樹「すぐれた考え方入門」三笠書房 2006年 p.73～74
- (4) [http://www.mapletown.ca/column/?column\\_id=10373](http://www.mapletown.ca/column/?column_id=10373)より
- (5) 百科事典マイペディア 2003年版
- (6) 小島一夫「デンマークにおけるスポーツについての一考察」つくば国際大学紀要12号 2006年 p.81～97
- (7) Badminton Alberta <http://www.badmintonalberta.ca/page.aspx?id=1961>
- (8) 山口泰雄 編著「健康・スポーツ社会学」建帛社 1996年 p.137